

聖書：マタイ 7：13～14

説教題：いのちに至る門

日時：2018年11月4日（朝拝）

5章3節から始まった山上の説教は、前回の7章12節で一つの結論に達しました。7章12節は「黄金律」、ゴールデンルールと呼ばれるものでした。イエス様はこれまでのことをまとめて、このように言われました。「ですから、人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。これが律法と預言者です。」さてこのあと7章27節までの部分は、人々に「決断」を迫る箇所です。今日の箇所を含めて、このあと3回に分けて見て行きますが、いずれもそうです。すなわちメッセージはただ聞いて終わりにしてはならない。そこに実際に生きる者とならなければならない。そのアピールをイエス様は色々なイメージを用いて繰り返し語って行かれます。

今日はその一つ目、狭い門と大きい門のたとえです。もし私たちの行く先に狭い門と大きい門あるいは広い門があったら、私たちはどっちを行こうとしましょうか。普通はわざわざ狭い方には行かないと思います。狭い門を通ることは窮屈そうです。自由度が少なくなりそうですし、荷物がぶつかってこすれてしまうかもしれません。荷物を後ろに置いて行かなくてはならないかもしれません。面倒なことになりそうです。苦しい感じがします。一方、広い門は楽です。スペースに余裕があります。より自由に入って行くことができます。しかもそこから入って行く人は多い。沢山のひとと一緒に道に行くことは心強いですし、楽しそうです。安心してそこを通ることができます。ところがイエス様は今日の箇所で「狭い門から入りなさい」と言います。なぜでしょうか。まず13節が言っていることは、大きな門と広い道は「滅び」へつながっているということです。沢山のひとと進むその行き先は恐ろしい最期が待っている。その道の終わりは永遠の死であるということです。どういうことでしょうか。大きな門と広い道に行くことは、自分にとって楽な道、自由に気ままに振る舞える道に行くことであり、ここでは具体的にはイエス様の言葉を聞いても、それを行わない歩みのことを指しています。その人は今しばらくは自由を謳歌して楽しいかもしれません。しかし罪という問題を未解決で先送りしたまま、進むことになります。そういう人に最後に待っているのは神のさばきです。いや私はそんな悪いことはしてない。テレビで報道されるような犯罪はしていないし、人様に迷惑をかけるようなこともほとんどしていない。自分は平均点以上の善良な市民として歩んで来たという自負心を多くの人は持っているかもしれません。しか

イエス様は5章20節でこう言っておられました。「わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」 律法学者やパリサイ人は、当時のユダヤの社会で最も道徳的な人たちと敬われていた人々です。彼らは当然、自分たちは正しい人間だと自負していたでしょうし、自分について良いセルフイメージを持っていたでしょう。しかしその義では天国に入れまいと言われた。神が良しとされる基準には到底達し得ない。イザヤ書64章6節：「私たちはみな、汚れた者のようになり、その義はみな、不潔な衣のようです。」 どんなに私はあのような良いことをした、このような良いこともしたと誇っても、それは神の前では不潔な着物のようなものではない。それにもし今の私たちがそのまま天国に入れるなら、そこは全然天国ではなくなるのではないでしょう。地上と同じように互いにねたみ、憎しみ、争い、不和が絶えない場所となる。

ですからイエス様は「狭い門から入りなさい」と言われます。これはこれまで見て来たイエス様のメッセージに聞き、それに従う生活へ進むようにということです。狭い門から入ることは、ある意味で勇気がいることです。決断をして入って行かなければなりません。ある種の覚悟また努力が必要とされます。そこにはある種の困難があるということが暗示されています。一体なぜイエス様に従う生活は狭い門から入ることなのでしょう。その理由としていくつかのことが考えられます。三つのことを述べたいと思います。

一つは古い自分に死ぬというプロセスがそこで要求されるということです。これまでのイエス様のメッセージには厳しい要求が色々ありました。5章39節：「悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい。」 44節：「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」 これらは私たちにとって素直にならずいて聞くのが難しい言葉ではないでしょうか。私たちは相手に自分の頬を打たれたら相手の頬を打ち返してやりたいと思います。あるいは敵を愛する必要などはなく、二度と相手が自分に害を及ぼさないように徹底的に打ちたたかなくてはと考えます。そういう私たちの生まれながらの考えとは全く反対のことが言われていました。また7章12節：「人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。」 私たちは、相手が自分に良くしてくれたら、私も相手に良くしようとは思いますが、しかし自分がしてほしいと思うことを、相手が誰であれ、どんな人に対しても自分から行っていくということを考えると、ここから逃げ出したいくなります。そんなことは自分には

無理だ！地上にある人間には不可能だ！と言って、否定しにかかる。しかしそうしてこの道に進もうと努力しないことは結局広い道に行くことではないでしょうか。狭い門から入るとは、イエス様に従ってこの難しい課題にも取り組んで行くということを意味します。このように自分と戦い、古い自分に死ななければならないという意味での狭さがあります。

またこの道が狭いと言われる理由の二つ目は、戦いは内側にばかりでなく外側にもあるからです。イエス様は5章10～12節で「義のために迫害されている者は幸いです」と言われました。すなわちイエス様に従う道には迫害があるということです。多くの人々が広い門を通過して自由を謳歌しながら進んでいる中、私たちが狭い門から入ろうとすると、人々から奇妙がられます。なぜ好き好んでそんな狭い道、歩きにくい道に行くのか。あのイエス・キリストのどこが良いのかと不思議な目をもって見られ、冷やかされ、何かあるとバカにされたり、様々な嫌がらせや迫害されるような扱いを受けます。そのように扱われることはもちろん私たちにとってつらいことです。しかし一般の人からそうされるだけでなく、自分の愛する人、家族からもそうされることがあります。10章34～36節:「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っははいけません。わたしは、平和ではなく剣をもたらすために来ました。わたしは、人をその父に、娘をその母に、嫁をその姑に逆らわせるために来たのです。そのようにして家の者たちがその人の敵となるのです。」 私たちとしては良いものを信じていると思い、大事な人々にもこれを知ってもらいたいと思っているのに、その人たちが反対する。「やめなさい。そんな狭い道は行かないで、私たちと一緒に、もっと広い、この楽しい道を行きましょう！」と強く訴えかけて来る。そういう中で自分が正しいと思うこの道を選んで進み続けるのかを問われるのです。そういう意味でこの門は狭いのです。

そして三つ目にサタンの攻撃があります。単に人間のレベルで内側に戦いがあり、外側にも戦いがあるだけではなく、その両方にサタンは働きかけて、私たちがこの道を行くのをやめさせようとします。私たちの心を働きかけて「お前なんかはこの道を進むことはできない。もっと楽な道、自分を満足させる道を行ったらどうか！」とささやきかける。また外的環境に働きかけて私たちを意気消沈させ、この道を進む勇気を失わせようとする。

このようにイエス様を信じる信仰生活とは、最初に信じれば後はスムーズに行くとい

う気楽なものではありません。狭い門を何とかくぐった後、その後の道もまた細いのです。その道は引き続き困難なのです。私たちはそこで絶えず広い道に戻るようにとの誘惑を受けます。その中で狭い門・細い道に行くことを選び続けるのです。

さてこのように見て来ると、この道を進むことには良いことが何もないように思われるかもしれません。しかしもちろんイエス様はここで素晴らしいメッセージを語っておられます。それは 14 節にあります。狭い門と細い道はどこにつながっているか。それは「いのち」に至るとあります。このいのちとはまことのいのち、永遠のいのちのことです。天の御国において神とともに永遠に生きる至福のいのちのことです。手前だけ見ると、イエス様に従う道は困難ばかりで辛いことが多いように思えます。それに比べて大きな門を通り、広い道に行くことの方がはるかに楽しそうで魅力的です。しかしそれぞれがどこに行き着くのか、その到達する場所を良く見なければならぬ。大きい門と広い道の終着駅は先に見た通り、「滅び」です。しかし狭い門と細い道が導いてくれる最終地点は「いのち」です！私たちはこの最終到着地を良く見据えて、自らが進むべき道を選び取るべきではないでしょうか。そして確かに永遠のいのちは狭い門と細い道の先にあることを私たちは確信します。今のままの自分で天国に入れるなどということはありません。先に見た通り、こんな私たちがそのままの状態が集まる場所は天国にはなり得ません。もし私たちが神が豊かに臨在される天の御国に入るなら、この私の今の性質や考え、生活が変わって行かなければなりません。そのためにはやはり狭いと言われる道を通してこそ、そこでの訓練と聖めのプロセスを通してこそ、私たちは造り変えられて行きます。そういった取り組みと格闘の先に栄光があり、真のいのちの祝福があるということは、当然のことだと思います。

しかしそんな高貴な道を私たちは進んで行けるのでしょうか。それは無理な話ではないかとも思います。しかし聖書のメッセージは人間の力で進んで来い！というものではありません。山上の説教最初の 5 章 3 節も「心の貧しい者は幸いです」と言われました。自分の徹底的な無力さを告白して、神にあわれみを求めて近づく者、その者を神はあわれみ、祝福するということが言われました。また少し前に見た 7 章 7～11 節でも「求めなさい、探しなさい、たたきなさい」と神に祈り求めるべきことが奨励されました。これは山上の説教の世界に生きようとしても自分の力ではできないと悩む私たちに対する励ましの御言葉です。ですからいつも神の助けを祈り求めながらこの細い道を歩んで良いのですし、そのようにしてこそ、この道を進み続けることができるのです。

それゆえに、この狭く細い道に行くことは、今まで見て来たことと矛盾するように思われるかもしれませんが、実は幸せな道、そして楽しい道なのです。この道を歩む中で私たちは神の恵みをいよいよ深く味わうからです。箴言3章17節：「知恵の道は楽しい道。その通り道はみな平安である。」 まことの知恵であられるイエス様に従う知恵の道は楽しい道、平安に溢れる道です。山上の説教の冒頭も「～する者は幸いです」と繰り返し語られて、この道が真に幸いな道、幸福な道であることがまず言われました。またこの狭い道は神の命令に沿って歩む道ですが、Iヨハネ5章3節に「神の命令は重荷とはなりません」とあります。イエス様もこの福音書11章28～30節で「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい」と言われ、「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです」と言われました。この狭い道はイエス様が一緒に歩いてくださる道であり、イエス様が助けてくださる道です。そのイエス様の助けをいただいて、イエス様を味わいながら、いよいよのちに向かって歩む道、いや増す光に向かって進む素晴らしい道、喜びに満ちた道なのです。

そしてもう一つ触れるなら、14節の最後に「それを見出す者はわずかです」とありますが、——これは私たちは大多数の人と流れるまま進むのではなく、たとえそこから一人離れることになっても、この道を見出して進むべきことを示していますが、——だからと言って信仰生活はさみしく孤独なものであることを意味しません。今見たように、それはキリストとともに歩む道、神とともに歩む道です。またそこには多くの仲間たち、沢山の民もいます。8章11節：「多くの人々が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。」 20章28節：「多くの人々のための贖いの代価として」。黙示録7章9節：「すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が、云々。」 狭い門をくぐる時、このような多くの神の民がいることを私たちは知り、その後続く道はその人々と天に向かって歓喜の大神行進をする道でもあるのです。

私たちは果たしてどの道を選び取る者でしょうか。この二つの道の他に中間の道はありません。もし私たちが狭い門と細い道を選んで進んでいないなら、それは大きい門、広い道を進んでいることを意味します。そこをそのまま進んで大丈夫でしょうか。イエス様は「滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです」と言われました。私たちは「狭い門から入りなさい」という御言葉に従いたいと思いま

す。狭い門を見出す者はわずかと言われていています。ボーッとしていれば、それを見逃してしまいます。私たちはイエス様の御言葉に注意して耳を傾け、いのちに至る門から入って歩みたい。そこに続くのは細い道ですが、神の大きな助けが約束されています。その神を信じて、この道こそを進み、日ごとにゴールにある永遠のいのちを予感し、その前味を味わう歩みへ、また日々戦いはあるけれども、それ以上に主の小道は楽しく、その通り道はすべて平安であるという真に幸いな道を歩む者へ導かれて行きたいと思えます。